

12.18

[金]

FUJITSU Presents Concert 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール／19時30分開演（19時からプレ・コンサート）
Special Concert, presented by FUJITSU, Ltd
Friday, 18th December, 19:30 (Pre-concert Performance from 19:00) / Suntory Hall

指揮／上岡敏之Conductor TOSHIYUKI KAMIOKA

ソプラノ／イリーデ・マルティネスSoprano ÍRIDE MARTÍNEZ

メゾ・ソプラノ／清水華澄Mezzo-Soprano KASUMI SHIMIZU

テノール／吉田浩之Tenor HIROYUKI YOSHIDA

バリトン／オラファ・シグルザルソンBaritone OLAFUR SIGURDARSON

合唱／新国立劇場合唱団Chorus NEW NATIONAL THEATRE CHORUS

合唱指揮／三澤洋史Chorusmaster HIROFUMI MISAWA

コンサートマスター／日下紗矢子Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ベートーヴェン 交響曲 第9番
ニ短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分]

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 “Choral”
I. Allegro ma non troppo, un poco maestoso
II. Molto vivace
III. Adagio molto e cantabile
IV. Presto – Allegro assai

《プレ・コンサート》19時から
ヴァイオリン／日下紗矢子 ほか
モーツァルト デイヴェルティメント ニ長調 K.136 [約15分]
MOZART / Divertimento in D major, K.136
I. Allegro
II. Andante
III. Presto

〔主催〕読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
〔協賛〕富士通株式会社

12.19

[土]

第182回 東京芸術劇場マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／14時開演
The 182nd Tokyo Metropolitan Theatre Matinée Series
Saturday, 19th December, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

20

[日]

第84回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール／14時開演
The 84th Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series
Sunday, 20th December, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

22

[火]

第587回 サントリーホール名曲シリーズ
サントリーホール／19時開演
The 587th Suntory Hall Popular Series
Tuesday, 22nd December, 19:00 / Suntory Hall

24

[木]

第5回 東京オペラシティ名曲シリーズ
東京オペラシティ コンサートホール／19時開演
The 5th Tokyo Opera City Popular Series
Thursday, 24th December, 19:00 / Tokyo Opera City Concert Hall

25

[金]

第20回 読響メトロポリタン・シリーズ
東京芸術劇場コンサートホール／19時開演
The 20th Yomikyo Metropolitan Series
Friday, 25th December, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

26

[土]

第13回 大阪定期演奏会
ザ・シンフォニーホール／17時開演
The 13th Subscription Concert in Osaka
Saturday, 26th December, 17:00 / The Symphony Hall

指揮／上岡敏之Conductor TOSHIYUKI KAMIOKA

※出演アーティストは左ページをご参照ください。

ベートーヴェン 交響曲 第9番
ニ短調 作品125 〈合唱付き〉 [約65分]

BEETHOVEN / Symphony No. 9 in D minor, op. 125 “Choral”
※詳細は左ページをご参照ください。

※本公演には休憩がありません。あらかじめご了承ください。*No intermission

〔主催〕読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
〔協賛〕NTTコミュニケーションズ株式会社（12/19、24）、非破壊検査株式会社（12/26）、大和ハウス工業株式会社（12/26）、トヨタ自動車株式会社（12/26）
〔助成〕文化庁文化芸術振興費補助金（トップレベルの舞台芸術創造事業）（12/19、20、22、25）
〔事業提携〕東京芸術劇場（12/19、25）
〔協力〕横浜みなとみらいホール（12/20）

上岡敏之

Toshiyuki Kamioka

日独で大活躍の実力派
ついに〈第九〉登場
鮮烈な新解釈に期待

東京生まれ。東京芸術大学で指揮、作曲、ピアノなどを学び、留学したハンブルク音楽大学でクラウスペーター・ザイベルに師事。キール市立劇場、エッセン市立アールト劇場のカペルマイスターを経て、1996～2004年にヘッセン州立歌劇場の音楽総監督を務め、98～06年には北西ドイツ・フィルの首席指揮者も務めた。

04年にヴッパータール市立歌劇場の音楽総監督(09年まで)に就任し、ヴッパータール響の首席指揮者となった。09年からはザールブリュッケン市のザールラント州立劇場の音楽総監督を兼任した後、14年からヴッパータール市立歌劇場のインテンダントと音楽総監督に返り咲いた。コンサートでも活躍し、ケルン放送響、バンベルク響、バイエルン放送響、シュトゥットガルト放送響などに客演している。また、04年か



©武藤章

らザールブリュッケン音楽大学の指揮科教授の職にある。

読響には98年に初めて客演した後、共演を重ねており、ベートーヴェン、ブラームス、R.シュトラウス、マーラーなどを指揮。ピアニストとしても活躍しており、今年7月には読響メンバーとモーツァルトのピアノ四重奏曲とブラームスのピアノ五重奏曲を共演した。

日本では読響のほか、N響、新日本フィルなどと共演し、今年4月から新日本フィルのアーティスティック・アドバイザーを務めている。

◇12月18-26日〈第九〉公演



©Grupo Nacion

ソプラノ イリーデ・マルティネス

Soprano Íride Martínez

コスタリカ生まれ。ケルン歌劇場の合唱メンバーだった1998年、バイエルン国立歌劇場でトロヤーンの〈十二夜〉世界初演に出演し、注目された。マゼール、コリン・デイヴィス、ビシュコフ、ゲルギエフ、ルイーザら著名指揮者の下で歌い、2008年にミラノ・スカラ座、11年には英国ロイヤルオペラハウスにデビューした。現在ウィーン国立歌劇場の専属歌手を務め、〈連隊の娘〉のマリー役のほか、同歌劇場やベルリン国立歌劇場で〈魔笛〉の夜の女王役などを演じている。

今回が読響初登場。

◇12月18-26日〈第九〉公演



メゾ・ソプラノ 清水華澄

Mezzo-Soprano Kasumi Shimizu

静岡県出身。国立音楽大学、同大学院とも首席で修了。新国立劇場オペラ研修所を経て渡伊。2007年〈仮面舞踏会〉ウルリカ役で二期会デビュー。近年では二期会〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉サントウツァ役、新国立劇場及び中国国歌大劇院(北京)での〈アイダ〉アムネリス役など着実にメゾの大役で評価を高め、14年二期会〈ドン・カルロ〉では自身念願であったエボリ公女役を演じ絶賛された。読響とはヴェルディ〈レクイエム〉で共演し、好評を博している。

第6回カルロス・ゴメス国際コンクール第2位入賞。二期会会員。

◇12月18-26日〈第九〉公演



©Eiji Shinohara

テノール 吉田浩之

Tenor Hiroyuki Yoshida

福井県出身。国立音楽大学と東京芸術大学大学院に学び、イタリア留学を経て本格デビューした。近年では新国立劇場〈フィデリオ〉〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉〈トリスタンとイゾルデ〉、日生劇場〈魔笛〉、びわ湖ホール〈サロメ〉などに出演。レパートリーは〈椿姫〉のアルフレード役、〈リゴレット〉のマントヴァ公爵役、〈カルメン〉のホセ役など幅広く、三木稔〈春琴抄〉、松村禎三〈沈黙〉などの邦人作品にも出演。また、国内の主要オーケストラとバッハ、ベルリオーズ、ドヴォルザーク、オネゲルなどの作品で共演している。東京芸術大学教授。

◇12月18-26日〈第九〉公演



©Karl Petersson

バリトン オラフ・シグルダルソン

Baritone Olafur Sigurdarson

アイスランド生まれ。レイキャビクとロンドンで学び、現在はザールラント州立劇場を拠点に、オペラとコンサートの両方で幅広く活躍している。昨シーズンはハノーファー州立劇場の〈リゴレット〉、ザールラント州立劇場の〈マクベス〉でそれぞれタイトルロールを演じた。2014-15シーズンはバーゼル歌劇場で〈オテロ〉のイアーゴ役を歌ったほか、ザールラント州立劇場で〈さまよえるオランダ人〉のタイトルロール、〈トスカ〉のスカルピア役、〈運命の力〉のドン・カルロ役などに出演している。

今回が読響初登場。

◇12月18-26日〈第九〉公演

合唱

新国立劇場合唱団

Chorus New National Theatre Chorus

オペラ、バレエ、コンテンポラリーダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として1997年に開場した新国立劇場で、オペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始した。100名を超えるメンバーは高水準の歌唱力と優れた演技力のもと、ずば抜けたアンサンブル能力と豊かな声量を誇る。公演をともにする出演者、指揮者、演出家、スタッフをはじめ、国内外のメディアからも高い評価を得ている。

読響とは2007年以降、年末の〈第九〉公演をはじめ数多く共演している。特にベルリオーズ〈ロミオとジュリエット〉、ラヴェル〈ダフニスとクロエ〉、ストラヴィンスキー〈詩篇交響曲〉では見事な歌唱を披露し、絶賛を博した。

◇12月18-26日〈第九〉公演



合唱指揮 三澤洋史

Chorusmaster Hirofumi Misawa

国立音楽大学声楽科卒業後、指揮に転向。1999~2003年、パイロイト音楽祭に祝祭合唱団指導スタッフとして参加。01年に新国立劇場合唱団指揮者に就任し、以後同劇場で行われるほぼすべての公演で合唱指揮者を務めている。11年には、文化庁在外研修員として、イタリア・ミラノに3か月間滞在。スカラ座合唱団の音楽作りを学び、イタリア・オペラに造詣を深めた。声楽を伴う数多くの管弦楽作品にも精通し、オペラ、オラトリオ指揮者として幅広く活動している。日本顕彰会より社会貢献者賞受賞。日本ワグナー協会会員。

◇12月18-26日〈第九〉公演

堀 朋平 (ほり ともへい)・音楽学者

ベートーヴェン 交響曲第9番 ニ短調 作品125 〈合唱付き〉

作曲：1823年夏～24年初春（スケッチは1815～17年頃から）／
初演：1824年5月7日、ウィーン、ケルントナートーア劇場／演奏時間：約65分

革命児の思想と技法の集大成

身の回りで精いっぱいだから、未来や隣人のことは分からない……専門分化とシステム化が行くところまで行き着いた現在、人々にそんな雰囲気か広がるのは当然かもしれない。太古の幸福な世界はもう帰ってこないのか？——。18世紀の半ばにジャン＝ジャック・ルソーが嘆いたこの傾向が、全ヨーロッパを覆い始めた「近代」という時代の初めのこと。観衆を失神させる熱狂的な筆を走らせ、はびこる個人主義と機械化する世界に巨大な疑問符を突きつけた男がいた。劇作家・詩人にして医学者であり、気鋭の歴史学教授・美学者として学生たちを沸かせたこの瘦身の男こそ、フリードリヒ・フォン・シラー（1759～1805）である。

人気博したシラーの詩

シラーは酒呑みでもあったようだ。26歳の時には、皆で酌み交わして踊る詩の形式を借りて、失われつつある

理想世界を大胆に描いた。いわく、^{めい}酩酊状態の歓喜（フロイデ）にあって人は、王も乞食もない、虫けらとさえも等しく生きる楽園（エリュジウム）に再び歩み入るのだ——。「歓喜に寄せて」のタイトルを持つこの詩は、1786年に発表されるや、^{またた}瞬く間に人気を博した。ベートーヴェン以前にこの詩に付けられた旋律は42を下らない。

さて、22歳でボンからウィーンに移り住み、「^{ビツァール}奇矯」と評されるほど斬新な音楽を世に送り続けてきた革命児ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が、シラー旋風の渦に巻き込まれないはずもなかった。「歓喜」を交響曲にしたいという願いは、作曲家がウィーンに出てきたその年に早くも芽生えている。ところが翌年この都市では、過激だという理由からシラーの著作が（かつてのルソーと同じく）禁書にされてしまう。

「歓喜」求める声 欧州中に

ベートーヴェンはその後もシラーを忘れることなく、断続的に構想を温め続けた。作家の死をきっかけに広まった全集版はウィーンでも普及し、1809年の手紙ではこの全集が読みたいと楽譜出版社に訴えている。何より大事なのは、「歓喜」の思想がヨーロッパ中で切実なものになっていったことである。というのも、「ウィーン会議」（1814～15年）以降、特にウィーンという都市は、ナポレオンが混乱させた国境線をなんとか元に戻そうと、きわめて保守反動的な体制を築き上げたからだ。そんな時代に、圧政者を射殺する英雄（ヴィルヘルム・テル）をも戯曲にしてしまうシラーという男が、警戒されるのは当たり前であった。

だが時流が許さぬ歓喜は、市民のあいだで着実に醸成されていった。こうして、作曲家自身が心をくだき、周囲も大いに気をもんだ〈第九〉初演の日がやってくる。合唱90人、弦楽器パート46人、管楽器も2倍という異例の規模で迎えたその日は、音楽の歴史からしても明らかに一つの転換だった。少し前、18世紀末には「何かよくわからないけれど深淵なもの」を描く器楽こそが声楽の上に君臨するに至るのだが、〈第九〉はそれを再び反転させてしまったからである。つまり終楽章で合唱が導入される瞬間こそ、後にワーグナーが言ったように、器

楽にもうできることがなくなって声楽が後を引き継ぐ限界点であった。以後、交響曲は混迷の時代に突入するのである。

つまりは、描かれた思想、世界史の背景、音楽史的な意味……これほど多面的に大きな意義を持つ作品、今日でも強いメッセージを突きつけてくる作品は、ほかに例がないだろう。音楽そのものも、後のマーラーが自分の交響曲について語ったように、使える技法すべてを注ぎこんだかのような集大成である。シューマンの言葉づかいを借りれば、四つの楽章はそれぞれ、世界の成り立ちを描く「叙事詩」「^{かいぎやく}諧謔」「叙情詩」を経て、「あらゆる戯曲の混合」へのプロセスを描く。人類史の数万年さえ^{たど}迎えるかのような巨大な交響曲のあらましをスケッチしておこう。

第1楽章では、原初の混沌を思わせる^{ぼうばく}茫漠とした音調から、次第にまとまりをなして分厚い響きが構築されてゆく。概してベートーヴェンの器楽は、二つの極による緊張関係に貫かれている。ここでは「ニ長（短）調 vs. 変ロ長調」がそれであり、あとの楽章でこの対置には大事な意味が与えられる。

第2楽章に、緩徐楽章ではなく激しい3拍子のスケルツォを置く構成は異例である。砲弾の爪痕も新しいウィーンでの初演時、この楽章にことさら大きな喝采が寄せられたのは、軍楽を思わせる音調が聴衆の耳に浸みわたったからだろうか。

第3楽章は、オペラのクライマックス

でよく女性が祈るシーンに通じる。形式は、おごそかな「アダージョ」とメヌエットの「アンダンテ」による二重の変奏である。それは「天国の静謐^{せいひつ}」と「現世の楽しみ」の対置であり、これを彩るのが「変口長調 vs. ニ長調」の対置にほかならない。

第4楽章では、それまでの楽章の音を順に鳴らしてそれぞれを否定した後、ようやくあの「歓喜の主題」が現れる。当時シラーの詩にあまた付けられた音楽の中でも、これほど単純で朗らかな旋律はない。天上の歓喜は（前楽章での対置を反転させつつ）ニ長調で描かれ

る。この「歓喜のニ長調」と「現世の変口長調」を両軸として音楽は進むが、最後にこれらを統合した第3の世界が現れる。星々のきらめく天上界がそれだ。実はシラーの詩はもともと9詩節に及ぶ長いもので、星々はすでに最初の詩節で語られていた。これをみずから編み直したベートーヴェン最大の意図は、ラストで星々を瞬かせ、これを「歓喜」の主題と織りあわせつつクライマックスを導くことにあったのだ。こうしてシラーの望んだ楽園は、ベートーヴェンの愛した夜空の星のもと、高らかに具現化する。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部、独唱（ソプラノ、アルト、テノール、バス）、合唱

An die Freude 「喜びに」

O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen, und freudenvollere!

おお 友よ この調べではない！
さらに心地よく 喜びにあふれる歌を とともに歌おう！

Freude, schöner Götterfunken, Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken, Himmlische, dein Heiligtum!

喜び！ 神の閃光^{ひかり} 天国の乙女たち！
私たちは 炎に酔いしれて 天国の汝の聖地に 歩を進める！

Deine Zauber binden wieder, Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder, Wo dein sanfter Flügel weilt.

時の流れに激しく引き裂かれた者も 神の不思議な力によって 再び結びつき
神の柔らかな翼のある場所で すべての人々は 同胞となる

Wem der große Wurf gelungen, Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen, Mische seinen Jubel ein!

ひとりの心の友を持つ 心優しい妻を得る
こうした幸福を得た者は 喜びに唱和せよ！

Ja, wer auch nur eine Seele Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle Weinend sich aus diesem Bund!

そうだ、この地上にひとりでも 魂の友を持つ者も とともに歌おう
そして、それが叶わぬ者は 涙とともにこの輪から離れよ

Freude trinken alle Wesen An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen Folgen ihrer Rosenspur.

すべての被造物は 自然の乳房から喜びを飲み
善人も 悪人も みな 創造主の薔薇の小路をたどる

Küsse gab sie uns und Reben, Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben, Und der Cherub steht vor Gott.

神は 接吻^{くちづけ}と 葡萄酒と そして 死の試練をくぐった友を 与え給うた
虫にさえも神は快楽を与えた そして天使ケルビムは 神の前に立つ

Froh, wie seine Sonnen fliegen Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn, Freudig wie ein Held zum Siegen.

喜びよ 太陽が広い空を 神の定めに従って駆けるように
同胞よ！ 自らの道を喜びをもって進め！ 英雄が勝利に向かって 走るように！

Seid umschlungen Millionen! Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder! überm Sternenzelt Muß ein lieber Vater wohnen.

抱き合おう！ 幾百万の人々よ！ この接吻^{くちづけ}を全世界に！
同胞よ！ 星々の彼方に 父なる神は住み給う！

Ihr stürzt nieder, Millionen? Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn überm Sternenzelt! Über Sternen muß er wohnen.

幾百万よ ひれ伏したか？ 人々よ 創造主を感じるか？
星々の天幕に 神を求めよ！ 星々の彼方に 神は住み給う！

訳：金子哲理